

所属	心理学研究科 現代心理学専攻 修士課程	修了年度	2020 年度
氏名	望月 弘美	指導教員 (主査)	加賀美 常美代

論文題目	夫婦間のストレスと性役割意識およびコミュニケーション態度との関連 —年代に着目して—
------	---

本文概要

【問題・目的】

夫婦は結婚生活を送る中で、夫婦の性役割意識とコミュニケーション態度が変化してくるのではないかと考えられている。女性は従来の専業主婦から仕事をもち、子育てをしながら働くことで、職業人・妻・母親という多重役割を担うようになり、多くの役割を調整しながら適応してきた(山田・岡田, 2019)。また、日本では急激な社会変動に伴い、夫婦は伝統的性役割をそれぞれ果たしていればよいと考える傾向は弱まり、代わってコミュニケーションやセクシャリティにもとづく親密性を求める傾向が強まっている(平山・柏木, 2004)。このことから、夫婦間の性役割意識の捉え方やコミュニケーション態度は男性・女性、また、年代によっても異なっていると考えられる。このことから、本研究では(1)夫婦間ではどのようなストレスがあり、どのような性役割意識、コミュニケーション態度、共同行動があるか、それぞれについて男女および30代、40代、50代、60代の年代別に明らかにすることを目的とする。(2)夫婦間のストレスに夫婦間の性役割意識やコミュニケーション態度、家事や外出の共同行動、属性がどのように影響しているのかを男女ごとに比較検討を行うことを目的とする。

【方法】

調査対象者：結婚3年以上、首都圏在住の男女30代、40代、50代、60代各年代103名の合計824人を対象にWeb調査を実施。調査内容①平等主義的性役割態度スケール短縮版尺度(鈴木, 1994)15項目②夫婦間コミュニケーション態度尺度(平山・柏木, 2001)22項目③対人ストレス尺度(高橋, 2013)25項目④フェイスシート(性別、年齢、子どもの有無、仕事の有無、学歴、夫婦の共同行動等)である。

【結果・考察】

男女別に各年代8群の平均値の差を検討するために一元配置分散分析を行った結果、男性30代は、配偶者が自分に接近しコミュニケーションを取っていると認識し、配偶者が自分に威圧や無視などのネガティブなコミュニケーションをしていないと認識していたことが示された。このことは、渡邊(2017)の先行研究とほぼ同様の結果となった。また、性差については、男性40代は女性40代・50代・60代より配偶者と一緒に家事を行っているという回答した人が有意に多かったが、配偶者の認識は異なる可能性があることも示された。これも男女では家事の認識にギャップが生じるといった渡邊(2009)の研究と一致した結果といえる。重回帰分析の結果、夫婦間のストレスに関連していた要因の男女の共通点は、配偶者から威圧される、無視されるという認識が各ストレスの発生要因に関わっていたことである。男女の違いは、女性の場合は配偶者が接近し、一緒に外出等の共同行動を行うことも配偶者への嫌悪感につながっていることが示された。配偶者からの疎外と不安については、男性は配偶者からの接近がないことが、女性は一緒に家事を行わないことが疎外や不安というストレスを生じさせていることが示された。このことは、夫婦間のコミュニケーションの基盤になる会話時間が必ずしも十分に確保されていないことが考えられる。このように、男女によって配偶者の接近の認識の違いや共同行動の家事の負担感が影響していることが認められた。以上のように、夫婦間のストレスに性役割意識やコミュニケーション態度、家事や外出の共同行動がどのように影響しているのかを検討することで、夫婦間のストレスの原因が明確になったことは意義深いことと考えられる。